

別紙 1 - 1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 澤田 つな騎

論 文 題 目

Clinical factors related to false-positive rates of patency capsule examination

(パテンシーカプセル検査の偽陽性に関連する因子の検討)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

小寺 泰弘



名古屋大学教授

委員

柳野 正久



名古屋大学教授

委員

中村 栄男



名古屋大学教授

指導教授

後藤 秀実



## 論文審査の結果の要旨

今回、当院においてパテンシーカプセル検査（PC）を施行した症例を retrospective に検討したところ、PC の小腸狭窄検出における感度、特異度、陰性的中率、陽性的中率は 93.8%、96.6%、99.6%、62.5%であり、陽性的中率が比較的低いことが示唆された。偽陽性と関連する臨床因子を検討した結果、便秘が有意な因子であった。このことから、PC 検査の偽陽性には消化管通過時間の延長の関与が考えられ、PC 検査の判定時間の延長、PC 検査時の消化管蠕動薬の使用の可否などが今後の検討課題と考察された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 1 例認められた偽陰性の症例は PC 検査で通過性ありと判定されてから、2 週間後にカプセル内視鏡検査（CE）検査を施行した骨盤内に多発狭窄を有するクローン病（CD）の症例であった。この症例を反省点は PC の通過性の判定後から CE 施行までに期間が長くなってしまい、その間に CD の病状が悪化し狭窄が進行したことと考察された。この症例以降は、開通性を確認した後、その日のうちに CE 施行するプロトコルを実施しており、それ以来は 249 例の PC 陰性症例に滞留は発生していない。
2. CD 患者では、PC 陽性であれば追加小腸検査で実際に狭窄がある可能性が高く（12/14 例）、PC 検査の狭窄検出の意義は高い。しかし、PC 陽性の場合でも狭窄部の潰瘍の有無により内視鏡的拡張術の適応が変わることや、PC 陰性の場合でも、粘膜の活動性は予後に相関することから粘膜の病状を評価して治療方針を検討することは重要とされている。これらのことから、PC 検査の結果のみでなく、内視鏡検査を追加することも临床上重要と考えられた。
3. 文献上、消化管内において PC は 40-100h で溶解始めるが、消化の状態により個人差がある。よって、過度な判定時間の延長は PC 溶解をもたらす開通性の判定を困難にしてしまう可能性がある。判定基準を伸ばした場合で評価方法は原形での排出に限定する必要があると考えられた。
4. PC 陽性の症例の中で、内視鏡所見な異常を認めない症例では、粘膜面に内視鏡的な変化をもたらさないが消化管蠕動の低下をもたらす何らかの異常が生じている可能性がある。それらの症例は腹部膨満感、便通異常、嘔気などの消化管症状を認める例を認め、機能的消化管障害（FDIG）を含んでいると考えられる。それらの症例の小腸粘膜組織検査や、糞便細菌叢などの検討は FDIG の新たな知見や別の疾患概念を生み出す可能性があり、今後の検討課題である。

本研究は PC 検査をより適切に運用するために重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	澤田 つな騎
試験担当者	主査	小寺 泰弘	柳野 正人	中川 彰
	指導教授	後藤 秀実		
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本検討中のパテンシーカプセル検査の1例の偽陽性症例について</li> <li>2. クロウン病における、パテンシーカプセル検査の結果の臨床的意義について</li> <li>3. パテンシーカプセルの溶解時間の目安について</li> <li>4. パテンシーカプセル検査の偽陽性症例に新たな疾患を見出す可能性について</li> </ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				